

# 辞書引き活動により育む自己肯定感

— 一年間の学級経営のまとめとして —

\* 鈴木 由佳, \*\* 本図 愛実, \*\* 佐々木 孝徳

Developing self-esteem by dictionary research activities

– As the end of a year of classroom management

SUZUKI Yuka, HONZU Manami and SASAKI Takanori

## 要 旨

第一著者は、道徳を中心とする学級経営に取り組んできた。子どもたちの成長において一定の成果を感じつつも、自己肯定感の向上という課題の解決のために、学級経営のまとめの時期において、辞書引き活動という視点の異なる活動を行うこととした。辞書引き活動とは、辞書で引いた言葉を付箋に書き、辞書の頁上部に貼り、指導者はそれを褒め、継続を促すというシンプルな活動である。付箋の累積を基にした周りからの称賛や、語彙力を高めることは自己肯定感の向上につながると考えた。それまでの活動や体験を土台としつつ、子どもたちには集中して取り組む姿がみられ、学級全体も落ち着くようになっていった。

Key words : 道徳の授業

## はじめに

第一著者がこれまでの学級経営において、最も重視してきたことに道徳性の涵養がある。子どもたちは、小さなつまずきにも自信を無くしやすく、自分自身に自信を持てないままになっていることが多い。自信を回復することができるように、日々の授業の中で、子ども一人一人を輝かせる必要があり、とりわけ、道徳の授業での活躍を意識し、それらにより、自分も学級の仲間たちも認めながら、よりよく生きようとする考えや態度を養うことを目指した。

20XX年度、Z校にて学級担当として出会った3学年の子どもたちも、「どうせ自分は」といった感情を抱きがちであり、それが他者の受けとめに思い至らない発言や行動となり、トラブルとなってしまうこと

もあった。一年間の学級経営のなかで、道徳の授業を核としつつ、学校の目指す子ども像である「伝え合い かかわり合い 認め合う子」としても成長しできるように働きかけを行った。

一定の手ごたえを感じつつも、年明けのまとめの時期に、自己肯定感の向上を強く促進するには、道徳の授業とは異なる角度からの働きかけも必要であると考えようになり、辞書引き活動を行うこととした。

道徳の教科書執筆など道徳教育の実践的研究を行っている佐々木孝徳（2023）は、子どもたちの道徳性の育成とは道徳的判断力を高めるということであり、そのためには、毎日の学級のなかの様々な出来事において、他者や、さらには自分自身の内的心情についても対話することが有効であるとする。「対話」という知的営みの成立は自己肯定感の向上ともなり、言語能力

\* 宮城教育大学教職大学院修了生（第15期）

\*\* 宮城教育大学教職大学院

はその土台である。

20XX年度の活動と成果について考察する。

## 1 4月から12月までの学級経営

### (1) 4月～7月

年度始めから夏休み前までの学級経営では、主として以下の五点の働きかけを行った。

第一は、学校目標から児童の実態に合わせた学年目標を設定し、学年で集まりその目標について話し合い児童に確認させた。学年目標は「話を聞く子 自分とまわりを大切にすること あきらめない子」である。クラスの正面に掲示し、振り返りの材料とした。学級ではそれに沿って、毎日、日直がその日に意識するクラスのめあてを決め、朝の会で発表し、帰りの会で振り返る時間をとった。学級全体が協働的に取り組むことから、自分に自信を持つことのひとつとなるように考えた。達成できた児童はおおいに褒め、より良い学校生活への意欲につなげることを意識した。

第二は、p4cにより、対話の楽しさを実感させることとした<sup>1)</sup>。具体的には、学級活動の時間を活用し毛糸でボールを作成するところから始めた。月に1～2回の実施にとどまったが、児童らにとっては新鮮な機会だったようで、活動に前向きな児童が多かった。初めは、好きなことや、透明人間になったらしたいことなど、児童らが楽しく考えられる意見交換を行った。普段拳手をしない児童が、自らボールを受け取ろうとアピールする活気ある姿が垣間見えるようになった。クラスの問題について話し合う機会を設けると、p4cに積極的に取り組む児童が増えた。

第三は、「学級のルール」を守ることを繰り返し指導し徹底させていくことである。授業時の姿勢、机上の学習用具の置き方、返事、言葉の使い方(ちくちく言葉とふわふわ言葉)、給食当番・掃除当番活動、ハンカチ・ティッシュの携帯や手洗いの実施、宿題への取り組みなどについて、「学級のルール」としてみんなで行うべき内容や姿を理由とともに示し、安易な見逃しや変更をしないように留意した。個人差はあるものの、意識して生活しようとする姿勢が育った。

第四は、道徳を学級経営の軸とし、あわせて自己肯定感を高める土台になるように考えた。まずは授業デザインについて見直しを図った。様々な学校業務

の中で、一番大切なはずの教材研究の時間が思うようにとれない実態があることは否めない。指導書通りに行い、教材研究を二の次にしてしまうことも多かった。この点の反省に立ち、教職大学院での研究を踏まえ、自分の学校業務への取り組みをより効率的になるよう改善を図りつつ、道徳の教材研究の時間を捻出するようにし、ノートに授業の流れを自分なりに考えて書き出し、それらを基に授業を行うようにしていった。また、子どもの実態や、学校行事などと照らし合わせて、内容項目の配列を検討した(表1)。

授業の実践においては、ペアやグループでの話し合い活動を意識して取り入れることにした。特に「聞く」ことに特化して傾聴することの大切さを指導した。「相手の顔を見る」「頷く」「相槌を打つ」などの基本的事項を掲示物でも示し、いつでも確認できるようにした。

授業で良い考えを持ったとしても発表しなかったり、その時間内に教師が把握できなかったりすることも多かった。他の児童にも考えさせるために、ピックアップした児童の感想をまとめたものを配布した。子ども一人一人にファイルを配り、こうした配布資料やワークシートを保管し、学習の蓄積を振り返ることができるようにした。授業のなかでも既習事項の確認の際などに利用した。個人ファイルだけでなく、廊下にも、学習した内容項目の振り返りができるように、授業内容をまとめた資料を掲示した。なお、学年全体で道徳の授業を実施するなどして、学年担当教員の児童理解を深めていくことも行った。

第五は、行事について、達成感と自分への自信を持つ機会とするように位置づけた。5月の運動会では、目標に向かって頑張ることの大切さを実感してほしいと考えた。個々に自分なりのめあてを設定し、活動に主体的に臨むことができるようにした。3年生は、4年生とよさこい踊りを踊るのだが、この踊りは3年生にとっては難易度がかなり高い。例年4年生が3年生によさこい踊りを教えることになっている。4年生は小グループ毎にスモールステップで踊りを伝え、毎回練習の反省で3年生の良い所や頑張っていた所などを話してくれたことで、3年生は少しずつ自信を持って生き生きと練習に取り組んでいった。本番では、全員が一つとなり、素晴らしい踊りを披露することができた。

表1 道徳の授業 内容項目の配列(抜粋)

	学校行事との関連	各教科との関連	教材名(内容項目)
4月		特別活動(学級開き)	2あいさつをすると(B 礼儀)
5月	運動会		7いいっち、にいい、いいっち、にいい(B 友情、信頼)
6月		理科(昆虫)	4ツバメの赤ちゃん(D 自然愛護)
7月		体育(保健・健康な生活)	5ゆうすけの朝(A 節度、節制)
8月		学活(夏休みの過ごし方)	19耳の聞こえないお母さんへ(C 家族愛、家庭生活の充実)
9月	Z 祭りに向けての準備		6しょうたの手紙(C よりよい学校生活、集団生活の充実)
10月	全校美化活動		11ごみステーション(C 勤労、公共の精神)
11月	学習発表会		20ーりん車にのれた強い意志(A 希望と勇気、努力と強い意志)
12月		音楽(世界の歌)	13三つの国(C 国際理解、国際親善)
1月		特別活動(冬休みの過ごし方)	29ぼくのおばあちゃん(C 家族愛、家庭生活の充実)
2月	Z 隊感謝の会		33ふるさといいとこさがし(C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度)
3月		防災(震災復興)	3ヌチヌスグージ(D 生命の尊さ)

## (2) 9～12月

夏休み明け以降の学級経営においては、以下三点を主な働きかけとした。子どもたちには、発表したことをただ言い合う様子があり、お互いを認め合い、落ち着いて他者の考え・意見・気持ちに思い至るように、聞く態度を身に付けることが必要であると考えた。

第一は、聞く態度に重点を置いた指導である。周囲との「対話」の中で、自分の考えをしっかり聞いてもらえたり、受け止めてもらえたりすることが、自己肯定感の向上につながると考えた。また、相手の考えを聞くことで、より新しい考えに気付いたり、自分の考えを深めたりできる。その大前提として聞く態度に重点を置いた。「相手の目を見る」「頷く」「相槌を打つ」ことを、話し合いの度に確認した。また、授業の活動の内容により、相手の考えに対して質問させたり、自分の意見を述べさせたりすることも行った。繰り返し行うことで、「きちんと相手の話を聞こう」という姿が増え、少しずつ、話し合いの質が変化していったのが見てとれた。

第二は、学習発表会に向けて一丸となって練習することの大切さを実感させることである。学習発表会は、11月中旬にあり、社会科や総合などでの学習の成果

をオリジナル劇として発表した。現代にタイムスリップしてきた伊達政宗に、現在の仙台の様子や校区にある遺跡などを紹介する内容である。話に出てくる伊達政宗や、遺跡などに、より一層興味を持ち、関連する本を読んだり自分なりに調べたりする様子が見られた。劇では、一人一人が自分の役割を自覚し、堂々と演じること、歌では、みんなの心を合わせることを目標に据え、練習に励んだ。発表後は「楽しかった」「先生たちのおかげで練習の成果が発揮できた」などの感想が聞かれた。

第三は、夏休み前と同様に、道徳の授業を核にしつつ、他の教科との関連も意識しながら道徳性の涵養を目指した。国語で「パラリンピック」について調べたことをリーフレットにまとめる活動があった。クラスに外国籍の子どもが一名在籍しており、周囲との関係づくりがうまくできないでいた。調べ学習を通したり、道徳の「三つの国」(C 国際理解、国際親善)を学習したりする中で、世界の様々な国があり、国によってもその見方や考え方には違いがあるということ、互いに尊重し理解し合うことの大切さを意識させた。学習を通して、周囲の理解も進み、少しずつ、本人と周囲との関係改善が見られるようになっていった。

## 2 まとめの時期にむけての課題

### (1) 子どもたちの成長

4月から12月までの学級経営としての働きかけの中では、子どもたちの成長を感じられる場面が多々見られた。

毎日のめあては日々変わるが、その日の天候や時間割、近頃の学級の状況を考慮した内容になっていることが多くなり、児童の主体性も感じられた。普段の生活で意識して生活しやすい、具体的な内容にもなっていた。教員側も「しっかり先生の話聞こう」というめあてならば、学年目標にも関連することを意識させ、すばらしいめあてであることを褒めた。その日は子どもたちもそのめあてを意識して生活し、互いに呼びかけ合う姿などが見られた。自分たちで決めたことを守ろうという積極的な態度が育った。

また、p4cに関連することでは、クラスの問題について、対話することができるようになっていき、なぜ宿題を行う必要があるのか、掃除の時間になぜおしゃべりをしてはいけないのかなどのテーマについて、真剣に考えて発言する様子が見られるようになった。強引に一つの結論に持っていかないようにし、たくさんの発言を引き出し、問題となっていることについて、自分の言葉で考えを表すことができるようになってほしいと考えた。「また問題が起こったら、p4cで話そう」と、みんなで話すことを肯定的に捉える児童も多くなった。

年間を通して重視してきた道徳の授業については、授業では、児童が自ら考えたいような発問を意識して行ったことで、次第に児童が発問に揺さぶられ真剣に考えたり、自分の考えに自信を持つことができたという雰囲気が生まれていった。他の児童の意見に影響される様子も見られた。

11月には、中学年代表として「SL公園で」(A善悪の判断、自律、自由と責任)の研究授業を行った。目指す児童像に向けた指導の手立てとして、「手立て1 ワークシートの工夫」「手立て2 話し合い活動の工夫」の2つにしばった。手立て1では、心情スケールを用いて自分の立場を明確にしたり、中心発問で自分の考えを書いたりできるような自作のワークシートを用いた。手立て2では、中心発問以外にも「問い返し」や「揺さぶり」の発問を意識して行った。ペアでの話

合いを通して、自分の考えを相手に伝える機会も取り入れた。児童らの意見を黒板にまとめた際には、構造化を意識した。

当日は、いつもと違う環境に緊張する児童の様子が見られたが、普段の自分たちの実態を想起させ、「人間の弱さ」をより意識させるような「揺さぶり」の発問を行うことで、児童らの本音を引き出すやりとりを試みた。主人公が正しくないことだと分かっているが友達を止められなかった弱さに自分事として共感させつつ、「正しいこと」を行うために大切なことを児童に考えさせた。「強い心を持つことが大事」「正しいことをするという自信を持つ」など、今後児童に身に付けてほしい意見がたくさん出てきた。

ワークシートにも自分なりの言葉でたくさん記述する児童が多くみられた。「隣の人の発表がいいと思ったから紹介したい」という発言もあった。きちんと相手の話を聞いているからこそその発言である。聞くときの姿勢を繰り返し指導してきたことで、児童にその姿勢が浸透していることがうかがえた。他者のよい所をみんなの前で発言できるのは自己肯定感が育っているからだとも思われる。こうした子どもたちの様子から、授業後の検討会では「対話」の深まりを意識させることを大切にしたい授業を実践していきたいといった声に参加した教員たちから聞かれた。

11月の学習発表会の劇では、練習を積み重ねるごとに、声の小さかった子も堂々と大きい声を出すことができるようになったり、みんなで心を合わせてきれいに歌ったりすることができるようになっていった。自分なりのめあてに向かって、それぞれが頑張ることを意識させ、「よい劇にしよう 見る人を楽しませよう」と心を合わせることの大切さを何度も確認し合った。本番では、練習の成果を発揮し、どの子も生き生きと発表することができた。どの子も自分のめあてを達成できた嬉しさ、家の人に褒められた喜びを感じるなど、学年として団結し大きく成長できた行事となった。

### (2) 課題

このように大きな成長がみられた一方で、生活全般となると、子ども同士の些細なトラブルや、学校のきまりが守れない姿などが見られた。改めて、指導の困難さを感じていた。自己肯定感に関しては、道徳に関するアンケートにおいて「間違いを指摘されるのが怖い」「人の気持ちを考えるのは難しい」と答える児童



もいた。自分への自信のなさに加え、その日の気分や友人関係の不安定さも影響していると思われた。

自分への自信や自己肯定感は、基礎学力が大前提でもあると考えるが、学力に関しても個人差が大きく、特に文章を読解して問題を解決する力が低いことをテストや普通の授業の中で実感していた。文章を読解する能力はどの教科においても必要な力となる。そのため、より多くの優れた文章に出会うことが大切だと感じる。だが、学校でも家庭でも読書に向き合う時間が減り、図書室の時間には図書室で自分の読みたい本をうまく探せない児童が数名いた。また、隔週で金曜日に、作文の宿題を出していたが、児童の語彙の少なさを感じることもあった。

これらの課題を乗り越え、4年生に自信を持って進めるような新たな手立てが必要であると考えた。

### 3 辞書引き活動と子どもたちの変容

#### (1) 辞書引き活動の実施

上記の課題解決に向けて、ユニット指導教員らと協議し、辞書引き活動を行うことにした。辞書引き活動とは、深谷圭助が提唱・実践しているもので、子どもが辞書で引いた言葉を付箋に書き、辞書の頁上部に貼る、指導者がそれを褒め、継続を促すというシンプルな活動である。読んだ単語の量が付箋の数として可視化される。付箋は累積的に貼っていくので、辞書は個人の所有であることが望ましい。深谷らは(深谷・吉川2020)、これを自己調整学習と位置づけ、自分に適した進み方である上に周りからの称賛が自己肯定感となり、学習意欲を高め、ひいては学習方略に結びつくとする。語種間共通モデルとも名付け、その有用性を実証的に示している。国語辞書だけでなく、英語辞書の他、他言語など、様々な形で応用可能であるとしている(深谷他2023)。

本実践では、2月下旬に国語の授業として、担任である第一著者とユニット指導教員がチームティーチングでガイダンスを行い、その後2週間、担任の指導により、朝の活動や隙間時間など、10分程度、時間を決め、辞書引き活動を行うようにした。回数としては15回程度であった。ただし、休み時間などを使って自由に行うことも奨励した。

ガイダンス授業では、自己肯定感の向上を意識し、

「言葉博士になろう」という呼びかけで活動を紹介した。付箋の書き方、貼り方を伝えた。各自で作業をし、10個読んだら各自のワークシートに自分でシールを貼ることにした。「自分なりのペースで大丈夫」と声掛けをし、じっくり読むことを促した。辞書を引くことに慣れていない児童には、個別に補助をした。

#### (2) アンケートにみる児童の姿

##### ① ガイダンス授業後

ガイダンス授業時、23名中、19名が登校していた。Google Formを用いてアンケートを行い、出席した19名全員が回答した。子どもたちの反応について、Google Formのグラフ等を用いつつ示したい。

A 辞書引き学習(ガイダンス授業)は楽しかったですか(10段階)

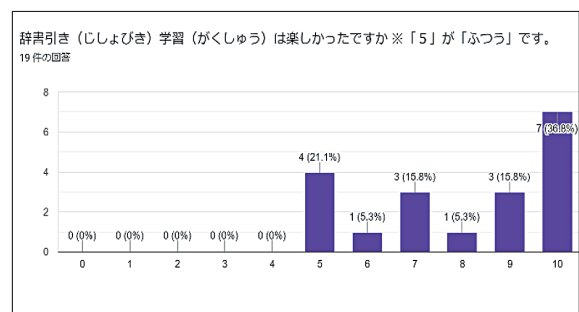


図1 辞書引き学習の楽しさについて

5を普通としているので、全員が普通の授業以上に楽しいと感じたことになる。9段階以上は10人と、クラスの半分以上が、かなり楽しいと感じている。新しい試みが子どもたちに新鮮に映ったことがわかる。

B 辞書引き学習は、あなたの国語の力を伸ばしてくれると思いますか

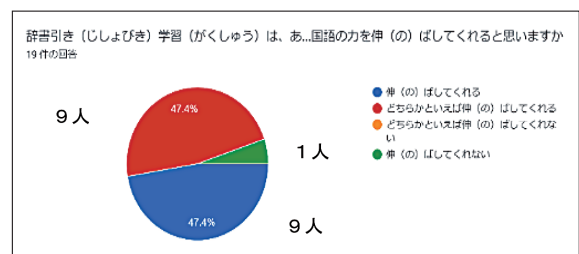


図2 辞書引き学習が伸ばす力について

18人が肯定的に回答した。

C ガイダンス授業後の自由記述

	辞書引き（じしょびき）学習（がくしゅう）で感じたり考えたり気づいたりしたことを、かんたんに書いてください
1	楽しかった
2	こんなにいろいろのっているんだなあ〜とおもいました
3	じしょを読むのも楽しいと思った
4	楽しい
5	言葉の意味がよく分かるから楽しい
6	今までこんなにじっくり辞書を見たことがなかったけど知らない言葉や面白い言葉がたくさん書いてあって面白かった
7	いろんな言葉を知った
8	とても勉強になって楽しかったです。
9	こんな言葉があるんだなと思いました。
10	いろんな言葉を勉強できて楽しいです。
11	言葉の意味
12	そんなじっくり見たことがないからこんなに言葉があって知らない言葉をして嬉しかったです。
13	最初はむずかっかけどいまはおもしろくできた
14	少しむずかしかった
15	いろいろな事が書いてあって分かった
16	楽しかったです
17	辞書引きは楽しいと思いました
18	色々なことを調べられて、嬉しかったし、楽しかった。難しいところもあったけどできたと思う。
19	・色々すぐに見つけられた ・色々知らない意味おしれた ・言葉は、知っていても意味は、知らなかったもので、嬉しかったです ・いつも使ってる言葉、こんな意味なのかを、あらためてしてよかったです。

図3 辞書引き学習について感じたこと

全員が肯定的な記述をしている。楽しいという感情を表わしている子どもが多数いる。日常的に見ている辞書から学びが多いことや、言葉についての再発見や再認識、驚きが楽しいという感情に繋がっている様子が示されている。

②辞書引き活動を2週間行った後（クラス23人中21人が出席・回答）

A 辞書引き学習は楽しいですか（10段階）（図4）

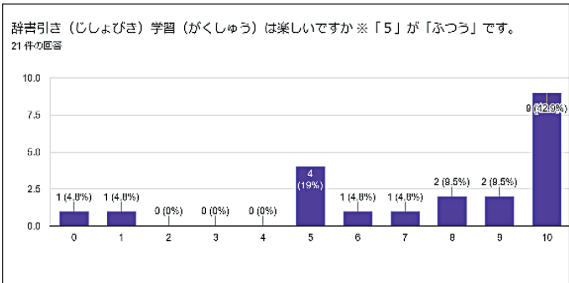


図4 辞書引き学習の楽しさについて

10段階のうち10と答えた子が、ガイダンス授業の7人（図2）から9人に増えた。楽しくない（0、1）と

答えた2人は、ガイダンス授業の時欠席者であった。

B 辞書引き学習は、あなたの国語の力を伸ばしてくれると思いますか

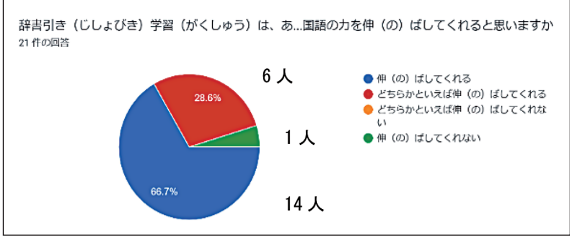


図5 辞書引きが伸ばす力について

「伸ばしてくれる」という回答が、ガイダンス授業の9人（図2）から14人に増えた。1人は伸ばしてくれないと回答している。この1名については次の項で言及する。

C 自由記述（図6）

	辞書引き（じしょびき）学習（がくしゅう）で感じたり考えたり気づいたりしたことを、かんたんに書いてください
1	いままでしなかったことがたくさんあった
2	自分の国語の力を伸ばしてくれました。
3	とても楽しかった
4	ちょっとした言葉博士になって嬉しいです。
5	いろいろなことばがかいてあったことにきずいた
6	楽しかった
7	じしょびきは言葉がたくさん知って楽しい
8	言葉の意味がわかった
9	色々な言葉があるなと思いました
10	こききき
11	初めて楽しい
12	辞書引き学習は自分たちの力になるといいです。
13	楽しい時間
14	いろいろな読み方があるんだなと思いました。
15	たのしいところです。
16	いろいろなことばをしれました
17	いろいろな事が書いてあってわかりやすかった
18	楽しかった
19	じしょびきをしていると楽しくなった
20	楽しい時間
21	案外すんなりできてたのしかった

図6 辞書引き学習について感じたこと

楽しい時間という記述が継続している。新しい言葉を知ることなど、自分の知識が豊かになることの喜びも示されている。ガイダンス授業で呼びかけた「言葉はかせ」に照らした達成感を示す回答もある。「国語の力を伸ばしてくれない」と回答した1名（図5）も、「い

ろいことばをしれました」(16)と肯定的な記述をしている。11のような記述をした子どもも図5では、「どちらかというと伸ばしてくれる」と回答していた。

D 4年生になっても、辞書引き学習をつづけたいですか(図7)

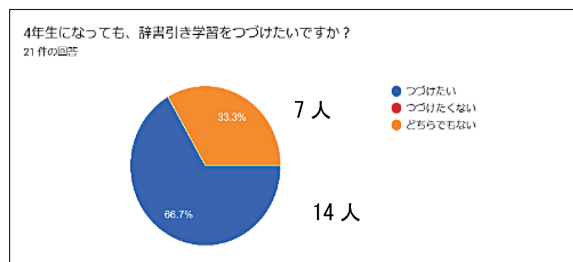


図7 辞書引き学習へ継続意欲について

14人が辞書引き活動の継続に意欲を示している。7人が「どちらでもない」と回答した。「続けたくない」を選んだ子どもはいなかった。

### (3) 6名の子どもたちの様子から

ほとんどの子どもたちは、食べ物や動物などを調べることが多かった。そのなかで次に挙げる6名は、自分なりの思いを持って活動に臨んでいるようだった。

#### ・A児(女児)

「天災は忘れたところにやってくる」「火のないところに煙は立たぬ」「ローマは一日にして成らず」「温暖化」など、単語だけでなく、ことわざも読み、付箋に書いていた。普段から、自分なりの考えをしっかりとっており、それがこの活動でも発揮されているようであった。

#### ・B児(男児)

「ありがとう」「おもてなし」「イエローカード」「せめる」「ゴールキーパー」「ライバル」「攻める」「実力」などの語を調べていた。学習に集中しにくいことがあり、言葉遣いが乱暴になり、友達とトラブルになってしまうこともある。サッカーが大好き。読書が苦手のように、図書の時間、着席ができず、図書室内をうろうろする。しかし、隙間時間、AIドリルではなく、辞書引きを選択し、集中して行うようになった。

#### ・C児(女児)

「平行四辺形」「体積」「角すい」「三角形」「スイス」「台湾」「韓国」「ブラジル」「スリランカ」「フランス」などの語をひいていた。学力不振になっており、特に算

数の力が一段と落ちていた。文章力や語彙力もあまりない。本人は熱心に取り組むのだが、定着しない。家庭のサポートもあまりない。算数の図形関連の言葉を調べていた。また、実施期間、国語で外国のことをグループで調べる学習を行っていたため、外国のことに関心を持ち、単語を選んでいる。

#### ・D児(女児)

「愛」「悲しみ」「大切」「道徳」「心強い」「助け合い」「ありがとう」「心」「願い」「笑顔」「生命」「友情」などの語が付箋として貼られていた。優秀で、周囲からの信頼も厚い児童。前向きな言葉を選択している。

#### ・E児(男児)

「おもしろい」「そうじ」「じしゃく」「さんかくけい」「しょうぼう」「とうふ」などを調べていた。発達に課題があり、特別な支援を受けている。通常の学習では、自分で辞書をひくことはできなかった。読書をすることもできず、AIドリルにも一人では取り組めないため、後ろ向きだった。だが、辞書引きを熱心に行う姿には驚くばかりであった。毎回の活動では、クラスで2・3番ぐらいにたくさん付箋をはっていた。理科で磁石の学習を行ったこと、総合で豆腐づくりも行ったこと、算数で三角形の学習をしたことを踏まえ、言葉を選択し、意味を確かめようとしたと思われる。

#### ・F児(男児)

「仲直り」「真実」「世界遺産」「中華人民共和国」「戦艦」「ポルトガル」「伊達」など語を読んでいた。髪を染めているなど一見目立つ児童。言葉も乱暴でトラブルも多々あるが、きちんとその都度反省して素直に謝ることができるので、人望があり、クラスの人気者である。正義感があり、「真実」を活動最初に選択しているのも彼らしい。歴史が大好きで、偉人の伝記(漫画)を熱心に読んだり、歴史好きの友達と好きな武将について話したりする様子もあった。それらに関連する言葉が読む対象になっている。

## おわりに

先にあげた児童の成長をみると、A児はもともと自分なりの考えをしっかりと持って発表したり文章などで表現したりすることができる子どもであったが、宿題の自主学習ノートでは、ことわざについてまとめたり、作文の中に引用したりするなど、学んだことを

生かす姿が見られた。こうした力はリーダーシップにも発展し、後に述べる、学年の最後に担任に向けた手紙を周囲に呼び掛け、作成してくれた。

B児については、好きなサッカーに関する言葉を調べるが続ぎ、辞書引き活動の時間の集中が普段の学習にも影響したのか、授業中の離席は少なくなっていた。

C児は、学力不振であったが、課題に前向きに取り組もうとする意欲はもともとあり、辞書引きから、「もっとできるようになりたい」という思いが加速したようで、他の学習にも一生懸命に取り組む姿が見られた。

D児は、辞書引きにも熱心に取り組み、語彙力が増したこともあって、学年初めのころは、周りでトラブルが起きた際には、自分は関係ないという態度を見せていたが、当事者の話をよく聞いて仲直りのきっかけを促すなど、頼もしい存在になっていった。

E児の学習の理解は配慮を要するため、「分からない」「できない」という思いをより強く感じていたと思われる。だが、それでも何事にも前向きに取り組むので、周囲はE児を温かく見守り応援する雰囲気があった。今回の辞書引きでは最終的に、クラスで1、2位を争うぐらいの量の付箋を貼った。このことで周囲から褒められ、とても嬉しそうにしている姿が何度も見られた。そのような経験は本児にとっては少ないことなので、物事により前向きに取り組めるようになっていった。

F児は、好きな歴史について調べることが多く、友達と歴史の話を楽しそうに話す姿が増えた。宿題の自主学習では、あまりやる気が見られなかったが、歴史のことについて調べて提出する姿が見られるようになった。

E児を筆頭に、発達に課題がある子どものこれまでにない一面が引き出されたことは、辞書引き活動の大きな利点であると感じた。自分のペースで行うことができ、集中できる仕掛けであること、直観的に子どもの心に響き、付箋がたまることで、自身の積み重ねを実感し、達成感を感じることができるようだった。

学年の終わりには、子ども同士のトラブルはほとんどなくなり、自主的な態度が見られる学級集団となっていた。最終日のお別れ会では、出し物としてロイロノートで作成したクイズを出したり、3年生の楽し

かった思い出などの振り返りをスライドにまとめて発表したりなど、今年度の学習を生かしたものが表現されていた。また、担任に内緒で全員分の手紙をまとめてサプライズでプレゼントしてくれた。「分かりやすく勉強を教えてくれてありがとう」「いろいろな話をしてくれてありがとう」「優しくしてくれてありがとう」など、子どもそれぞれが第一著者との出会いをどう感じたのかが示されていた。

学級の子どもたち全員が自ら手紙で気持ちを表現することについて、合意形成を行い、実際に行ったということは、子どもたちの間に信頼感が形成され、あわせて他者と意思疎通していくための言語能力も向上したからであると考えられる。学級全員の子どもたちが、4年生になることを楽しみに笑顔で3年生の最終日を終わることができた。

辞書引きを行ったのは、まとめの時期としての追加の試みであるので、この活動だけにより学級の雰囲気良くなったと明言することはできない。しかし、言葉を知ることの喜びや大切さを認識できた様子があり、付箋が増えていくこと、シールを貼ることの累積は、児童の意欲を喚起しているのは明らかであった。先にみたように、全員が4年になっても続けたいという前向きな姿勢を見せてもいる。物事に集中して取り組むことで得られる達成感や、自身の知識が増えていく実感を伴った成長の喜びは、子どもの自己肯定感を育むための大きなきっかけになり得る。学級経営においての様々な取り組みの中でも、辞書引き学習は大いにその意義を持ち、たくさんの可能性を秘めた学習ではないかと感じる。

## 注

- 1) p4c とは、philosophy for children の略語で、「子どものための哲学」として対話による探究を目指している。話し合いの手法や考え方を示している。

## 引用・参考文献

- 佐々木孝徳 (2023) 自律的な道徳性を導く道徳の授業：対話と多面的・多角的思考を引き出す問いを通して．宮城教育大学紀要57,pp.239-253
- 深谷圭助・吉川龍生 (2020) 語彙習得学習における語種間共通方略モデルの開発とその実践 ―辞書引き学習の動機づけと方略の有効性をめぐって―．現代教育学部紀要12 ,pp.47-55
- 深谷圭助・吉川龍生・王林鋒・関山健治・ショーンカッフアーキ・



ジャネット アドセット (2023) 複言語主義に基づく英国の小学校におけるフランス語辞書引き学習の実践. 現代教育学研究紀要 17, pp.13-23

【謝辞】 本研究をまとめるにあたり、所属校校長、教頭他、関係のみなさまにご支援いただきました。お名前は出せませんが、心から御礼申し上げます。

【付記】 第二、三著者の指導のもと、第一著者が、実践へのアクションリサーチを実施し、本文を執筆した。構成と文章指導は第二著者、全体の調整・校正は第三著者が担当した。

